

題目 恩送りはよい評判を得るのか？

氏名 尾崎萌子

指導教員 高橋伸幸

恩送りとは、「誰かに助けてもらったら、その人に恩返しするのではなく、また別の誰かを助けること」である。恩送りは美德として社会でも受け入れられ、過去の実験でも観察されている (Bartlett & DeSteno, 2006)。しかし恩送りを利他行動のひとつとらえた場合、それが存在する根拠は疑問視されている。将来における相手からの返報を期待できる直接互惠性や、自分の良い評判を聞いた第三者からの返報を見込める評判型間接互惠性とは異なり、恩送りが次々と連鎖して最終的に当人まで戻ってくる可能性は非常に低いため、恩送りは適応的な原理とはいいがたい。しかし、恩送りは社会的に望ましい行動であると認識されており、加村 (2014) の実験では人々は「自分は恩送りをする」という信念を持ち続けていた。そこで本研究では、恩送りをするはその人の評判を高めるのではないかと考えた。恩送りが良い評判を得られるのであれば、評判型間接互惠性の枠組みからその適応的基盤を説明できる。以上の議論に基づき、「恩送りをする人は、他の行動をとる人よりも良い印象を持たれる」という仮説を立てた。この仮説を検証するため、場面想定法質問紙を用いて、恩送りをする人とただの利他行動をとる人（無条件に助ける人）と何もしない人（助けてもらったのに助けない人）が持たれる印象を比較し、特に恩送りとただの利他行動の比較に着目した。結果は、恩送りをする人は何もしない人に比べ良い印象を持たれることを示した。ただの利他行動をとる人との比較では、場面にもよるが同程度に良い印象を持たれていた。印象項目別に比較すると、恩送りをする人は特に「公正である」「義理堅い」という良い印象を持たれていた。ただの利他行動をとる人は基本的に良い印象を持たれるが、場面によってはおせっかいであると思われ、そのとき相対的に恩送りをする人がより良い印象を持たれていた。以上、仮説は支持されたものの、ただの利他行動と比べ飛びぬけて良い印象を持たれているわけではないことから、「恩送りは良い評判を得られるから適応的である」とまで結論付けることはできなかった。しかし、評判と結びつけて恩送りを考えたとき比較対象となりうる協力行動はまだ多くあり、更なる検討が期待される。